

○個の学習状況を正しくとらえるための、予想される生徒の反応の具体化

本単元で働かせる主な数学的な見方・考え方	見方・考え方を働かせるための発問例
ア 問題の条件（線分の位置など）を変えて考える。	「問題の条件を変えて考えることはできそうですか。」（発展） 「問題の条件を変えると、成り立つ図形の性質も変わりますか。」（統合）
イ 特別な場合で考える。	「四角形がひし形、長方形などの特別な四角形だったらどうなるかな。」（発展） 「線分が中点で交わるとしたらどうなるかな。」（発展） 「合同な図形は、相似な図形の性質をすべてもっていると言えますか。」（統合）
ウ いつでも成り立つ性質なのかを考える。	「平行線が増えても、同じように成り立つと言えるかな。」（発展） 「四角形でも成り立ちますか。」（統合）
エ いくつか調べて新たな図形の性質を予想する。	「考察したことから、何が言えそうですか。」（統合） 「どんな性質が成り立ちそうですか。」（解釈）
オ 筋道立てて考える。	「どうしてそこに補助線をひいたのですか。」（根拠） 「他にどんな補助線をひいて考えられそうですか。」（発展）
カ 既習の図形の性質を使って考える。	「なぜ2つの角が等しいといえるのですか。」（根拠） 「どのような図形の性質を使って証明しましたか。」（根拠）

単元で働かせる主な数学的な見方・考え方を明確にし、その見方・考え方を働かせるための発問例を具体化します。それが「根拠」「解釈」「統合」「発展」のどの視点なのか分類し、対象の生徒を思い浮かべ、誰にどんな発問をするか事前にイメージします。

○曖昧さを追究し、価値付ける的確な教師の発問



生徒が何を求めているかよく観察し、生徒が必要としているときに、必要な発問をします。「数学的な見方・考え方を可視化し、価値付ける発問」「論理の飛躍、曖昧な表現を追及する発問」をしながら、個に応じた指導を行い、生徒がじっくり課題に取り組むことができるようにします。